

認知症の介護をしている施設職員が自身の内面的な成長を感じるようになるプロセスについて

植松 彩也

(香川大学大学院医学系研究科臨床心理学専攻)

目的と方法

本研究では、認知症高齢者施設に勤務し、認知症高齢者介護に携わっている介護職員が介護を通して内面的な成長を感じるプロセスを検討することを目的とした。加えて、成長感の程度の違いによって、成長感についての語りには違いがあるのか否か、また、ある場合はどのような違いであるのかを検討した。

インタビュー調査に同意した介護職員に対し、半構造化面接を実施した。同意した職員 11 名のうち、介護による成長・発達感に関する質問(岡本, 1997)の得点を基に、依頼する職員を選出した。得点が高い者から順に 4 名、得点の低い者から順に 3 名、計 7 名に個別のインタビュー調査を実施した。実施時期は、2023 年 10 月～11 月で、面接実施時間は、30～150 分程度であった。

主な質問内容は、介護を通じて自身が内面的に成長したと感じたエピソードと、それを含めた時間的な流れ、介護に関する自身や施設利用者の変化、その変化を成長であると認識しているか、である。分析方法は、時間軸上で介護職員の介護による成長のプロセスの可視化に適した複線往路・等至点モデル(Trajectory Equifinality Model : TEM)を用いた。

結果

成長感低群も成長感高群も、介護職に就いてから、〈相手のことを考えてケアの工夫をする〉という必須通過点を経由して、〈介護による成長を感じる〉という等至点に到達していた。また、はじめは〈基本的な介護しかできない〉という経験があったことや、必須通過点ののちに、〈職員とのコミュニケーションを大切に〉という経験があったことが語られた。

相違点に関しては、成長感高群のほうが〈関わり方に悩む〉や〈深く仕事をすればするほど現実がついていかずしんどい〉といったネガティブな経験の語りが多かったことが挙げられる。また、必須通過点ののち、低群は、〈視野の広がり〉や〈今

のベストを尽くしている実感〉など、ポジティブな実感が多かったが、高群は、〈先輩に相談する〉や〈伝え方を考える〉など、周囲の職員に相談し助言を求める経験や、自身の言動を振り返る経験が語られたことが挙げられる。

考察

成長を実感するプロセスとしては、〈利用者を怒らせてしまう〉などのネガティブな経験の後に、上司や同僚といった周囲の職員に支援を求めること、それによってケアを工夫すること、また、そのような支援を求められるような良好な関係であることなどのポジティブな経験によって、介護による困難を乗り越えることができ、それによって成長を実感していたと考えられる。

相違点として、低群は、ケアの工夫をするという語りののち、ポジティブな経験や実感の語りが多く、日々困難をどのように乗り越えていたかは、あまり語られなかった。それに対して、成長感高群のほうがネガティブな経験をネガティブな経験だと認識し、それにどのように対処して乗り越えたかも理解し、表出できていた。

以上のことから、介護職員の成長感を高めるために心理援助職ができることとして、職場での人間関係を良好にするためのアプローチや、介護職員の援助希求行動を促進するためのアプローチを行うことが挙げられる。また、自身の介護について振り返る機会が内省を促すことに繋がると考えた。そのため、介護職員の多忙な生活の中でも実現可能な振り返りの機会について検討し、そのような機会をもうけることも必要であるように思う。そして、職員が成長をより実感することで、より充実感ややりがいを持って介護に取り組むことにつながるのではないかと考えた。

主な引用文献

岡本祐子 (1997). ケアすることによるアイデンティティ発達に関する研究 1—高齢者介護による成長・発達感とその関連要因の分析. 広島大学教育学部紀要 第二部, (46), 111-117.